

# 山と博物館

第53巻 第11号 2008年11月25日

市立大町山岳博物館



「スパーパルライチョウ」

写真は、(財)東京動物園協会提供

## ライチョウに挑戦

小宮 輝之

地球温暖化は動物の生存にも影響を与えています。今、日本で気候変動による影響で危機にある動物の一つがライチョウです。今年の夏、ライチョウのたくさん生息しているノルウェーの北極圏にあるトロムソ大学に飼育係二名を派遣しました。ライチョウの飼いかた、殖やし方を学ぶためです。

トロムソ大学では北極圏の動物、ライチョウをはじめジャコウウシ、ズキンアザラシなども研究のため飼育しています。研修を受けることを条件に来年ライチョウの卵を60個譲り受けることになっていました。ところが帰国する二人に23個の卵を持たせてくれたのです。二人が一生懸命に研修し、トロムソ大学のみなさんにも受け入れられたからなのでしょう。孵卵器に入れた卵から5羽の雛が孵化し、現在2羽がすくすく育っています。

タンチョウもトキもコウノトリも半世紀以上も前から東京の動物園では増殖技術、人工飼料の開発、疾病対策を研究し、生息地での復活を支えてきました。タンチョウは千羽を越え、コウノトリやトキは野生復帰がはじまっています。次に動物園が貢献しなければならぬとしたらライチョウではないかという気がしています。ライチョウの飼育下での増殖技術の開発、生息地の博物館や動物園との飼育増殖への協力体制の確立、白山、御嶽山、蓼科山など絶滅した山々での復活のお手伝いなどができればとよいと考えています。

(上野動物園園長)

# 大黒鉱山をめぐる人々

## 大黒鉱山開発の端緒

(文中敬称略)

大黒鉱山は八方尾根を登り、唐松小屋から祖母谷温泉に二時間ほど下った所にあり、餓鬼谷の左岸には坑口が穿たれ、登山道沿いの台地には事務所や精錬所などがあつた。今でも坑口は三地点で十数ヶ所余り確認できる。また、主要設備のあつた台地には朽ちた柱や製錬した後の不純物、鍔(からみと読みスラグとも)が小山と積まれおり、餓鬼谷沿いには石垣や索道の部品なども流れの中に晒されている。大黒鉱山という名は、信州側からみて大黒岳の裏手の鉱山ということで名付けられたが、実質の位置関係は、餓鬼谷左岸から五竜岳に向つて掘られている。

鉱山は地元の猟師によつて明治三十九年に発見された。日本山岳会の機関紙『山岳』の明治四二年発行版に「案内人の松沢菊一郎が大黒鉱山を発見した」とあるが、鉱業法によるところの、試掘願いには中村兼松他二名とある。その後、中村等は鉱業権を日本でも有数の金鉱山「鷺ノ巣鉱山」を経営する為田文太郎に売却する。白馬村史によれば入夫一日三十銭という当時、売却額は一万余円だったという。売却の経緯は不明だが、当時創業していた白馬銅山の経営者とは為田は旧知で、そのつてだったかも知れない。

大黒鉱山は為田文太郎を手始めに五人の経

菊池今朝和



大黒鉱山の坑口の一部(下流部分)

一番高い所で約30mほぼ等高線上に坑口が並ぶ

営者に受け継がれ、大正一三年まで中断を含みながらも採鉱され、翌年には鉱業権は抹消されるが、紙数の関係でこの稿は大正のはじめ迄筆を措く。

## 為田文太郎時代の幕開け

為田文太郎は万延元年、岩手県和賀郡沢内村の富農に生まれ、明治二年初代沢内村長に選ばれる。その後県議に転進するが、政治に見切りをつけ、父親の安太の手がけていた鷺ノ巣金山の経営に手腕を発揮する。「売り上

額、月々四〇五〇〇円の小山を三年余りで、日本有数の金山、月産三貫目以上の鉱山に育ってしまった(和賀新聞)。明治三十九年には、為田は父安太から鷺ノ巣金山の経営権を継承する。いわば羽振りのよい時に、大黒鉱山の話が持ち込まれたのであつた(和賀郡史)。

明治三十九年北城村(昭和三十一年神城村と合併白馬村となる)森上の「かぎ丁」旅館と黒部川下流の交通の要衝、舟見町(現入善町、当時宿場町)の旅籠に、「鷺ノ巣金山為田礦業所」と染め抜かれた印半纏を羽織つた人達が現れた。翌年の開坑にそなえての下見であつた。折り良く黒部側沿いの道は、明治三四年から林業促進のため、内山村から祖母谷まで開鑿され明治三七年完成していた。鐘釣までは六尺幅(約一八〇cm)、そこから祖母谷迄は三尺幅(約九〇cm)の小径であつた。この難路は四年かけ、総工費四五、二五八円で開通した。さらに鉱山開発にとつて幸いしたのは、明治三八年に魚津町の豪商、廻船問屋の朝田新兵衛によつて祖母谷温泉が開湯されたことであつた。客室棟や浴室棟、さらに露天風呂があり、運動場にはブランコ、鉄棒などが備わり、食品など日用品は毎日荷揚げされ現代の健康ランドのような施設だった(下新川郡史)。さらに記録はないが、官林見回り路として南越まで道ができ、稜線までは踏査されていたと確実視される。

白馬村側からはまず大黒岳を乗り越し、事務所、精錬所予定地までの道作りが始まった。道は平川の左岸伝いにつけられ、途中で橋を渡りやや登つた平地に、物資の置き場と休憩所を兼ね平川倉庫が建てられた。萱で囲つた簡単なものだったが、充分雨風を凌いだ。道は整備されここまで馬が通つた。明治二

五生れの倉科きは子供のころお転婆でね、馬を扱えるので、毎日下の事務所と平川倉庫の間を馬に荷を付けて行ったり来たりしていた。あるとき為田文太郎さんが山から降りてきた時、どこか細野に泊る所ないかと聞かれたので、家ではどうかと云つたら、気に入つて、それからは為田さんが鉱山に来ると、いつも泊つた」と語つた。また為田文太郎の写真を見せると「わあー為田さんだ」と、相好を崩し、「そういうえば為田さんから頂いた小物入れがあるはずだ」、さらに「為田さんのお妾さん、おキミさんと云つてね、大黒岳の急な雪渓で滑り落ち、それからはあの雪渓のことをおキミ落としていうだ」と、九〇歳の倉科さんは、つい昨日のように話した。さて、話は戻り、平川倉庫から沢を越え、二本松尾根を登り途中から雪渓に移り最後にガラ場を詰める大黒岳の肩に出た。そこから尾根に入り、途中から沢伝いに下ると、事務所にてた。おおよそ一〇時間強の行程であつた(『山岳』



倉科きしさん(白馬村細野:現八方)

明治四三年版)。

道造りに並行し建物の建設がはじまった。明治四二年発行の下新川郡史に「現今、幅四間、長さ二十間、高さ三間の製錬所あり、その他幅三間長さ一〇間、二階建てなる宿舍、及び幅三間長さ八間の倉庫あり、五十人の坑夫は常に作業に従事せり、明治四一年に於いて八百貫の銅を製錬せりと云う」と記述している。人の背で物資、資材を運搬するこの時代、最大の困難は製錬炉の運搬であった。平川の辺まで馬車で運ばれ、その先は人力であった。当初、私は現地で耐火物を組み立てたと推定していたが、故老から「炉の下に丸太をコロがわり入れ、人力で引き上げた」(丸山五郎エ門、大三生)と聞いた。丸山さんの見たのは大正七、八年頃かも知れない。坑口を調査中、銅が付着した鋳型と、半分に割れ大黒の点の部分が残った鋳型を製錬所近くの藪のなかから発見したが、完成の鋳型は三〇Kgあった。鋳型で台形状に鑄込まれた粗銅は(当時の製錬技術では純度の高い銅を作るには限界があった)金色に輝き、八貫目(約三〇Kg)の重さで、大黒と印刻されていた。

### 越冬中の大惨事

このように順調に鉱山開発が進むが、三年目の明治四二年、大黒鉱山は危機に見舞われる。三月三日、餓鬼谷の鉱山小屋に越冬中の一人の坑夫が、決死の覚悟で雪と氷の唐松岳を越え、八方尾根伝いに村里へ駆け下り救助を求めてきた。秋田出身の熊谷要助(三五歳)だった。前年の一七名に続き、建物の保守等

で、四〇名余りの人夫が下山した後、一五名が越冬していた。前年の越冬は順調だったが、この年は、正月を過ぎた一〇日頃より体調を崩す人が続出し、二月も末になると殆ど越冬者が寝込んだ。二月二四日、富山出身の秋田林蔵(二二歳)が奥さんを残し逝った。四日後の二八日には、十五歳の林蔵の義弟の林平も後を追った。足はむくみ、次第にその症状は上になり、腹部が膨れ、苦しんで亡くなるという病だった。

体調の良かった熊谷要助は、支配人で岩手出身の高橋浅太郎(五四歳)に相談した。高橋は妻(五三歳)と娘(一四歳)を伴って越冬していたが、高橋も妻もすでに発病していた。かろうじて娘だけが症状が出ていなかったが、殆どは臥せ、死を待つといった状況だった。三月初めとはいえ、厳しい北アルプスの奥深い谷底である。熊谷要助は好天を待つて、細野部落に下ることを決意する。充分な装備を持たない坑夫が、餓鬼谷から唐松岳へと尾



坑口下の崩壊地から出てきた重量30kg、底には溶けた鉛が付着している

根伝いに登り、八方尾根の取り付きの急崖を命がけて下り、あとは尾根通しをひたすら細野部落めざし駆け下りた。早速、悲惨な状況は麓の鉱山事務所、警察(北安曇郡北城分署)など村人に知らされた。村人は大いに驚き救護隊を組織したが天候が悪く出発は六日となった。熊谷要助の説明により地元医師は脚気病と判断し、脚気の薬と野菜類の他ミカン、牛肉、杏の缶詰を準備し、隊員六名は鉱山小屋めがけて登った。登ってみると、越冬者の病勢は悪く死の淵をさまざまっていた。手当をなす術もなく、これでは雪解けまでは全員の命はもたないとの結論に達した。ひとまず六名の救助隊員は後ろ髪を引かれる思いで下山した。早速、調査の金生塚蔵を責任者に救助隊が組織された。隊員は麓の鉱山事務所から三名、それに屈強な強力一五名が選抜され、隊員は一九名となった。これだけの大規模な救助隊結成は、北アルプスでの遭難史上初めてではないかと思われる。翌三月二日、午前

四時一九名の救助隊は村を出発した。この救助登山はかなり困難を極めた。八方尾根は名うての風の通り道、筆者も冬季八方池山荘で二シーズン働いたが、三月初めとはいえ山は厳しい。途中風雪に翻弄されながらも唐松岳を越え、一二時間掛け午後四時やつと白一色の台地に着いた。しかし、一〇mを超える積雪のため、二階建ての屋根も見えない有様だった。そこで小高いところをめがけ、二ヶ所から試し掘りをはじめたら運良く、鉱山小屋の二階の窓に突き当たった。雪倉のような室内は真つ暗闇で、先頭の金生巡査は提灯を点けて内に入ると、生存者は全員原因不明の病気に罹り「氣息奄々生氣なく…もの言う力もなくして提灯の明かりを見詰め感謝の意を涙に表



事務所、精錬所跡地、柱材などが残る

わせる」といった惨状だった。二階、一階と小屋内を調べると、死者は増えていた。残念なことに救助隊が入山した日に、富山出身の山本由太郎(三二歳)、同妻のもと(三〇歳)、さらに秋田出身の佐々木梅之助(二八歳)が新妻を残し亡くなっていた。また翌朝には秋田林蔵の妻ひさ(二四歳)も夫の後を追った。若い越冬者がつぎつぎに亡くなったが、ひときわ涙を誘う光景があった。金生巡査が生存者の数が合わず、高湿度と死者の臭気に堪えて二階、一階と上下して眼を凝らし、再度階下に降り仔細に観察すると、炬燵と想像していたのは遺体であった。救助隊の仲間を呼ぶと、驚いたことにその遺体が動き出した。隊員の驚きをよそに、その死体の腋から幼い女の子の児が這い出してきた。その日亡くなった、山本由太郎夫妻の娘はな五歳であった。幼女が入り込んでいたのは、温もりが消えつつあ



坑口の下には三段の滝が威圧する

取り戻し、迎えの伯父と父の生家に帰った。昭和五六年夏、黒部市の僧方岳の麓にある、五歳の児の父の生家を訪ねた。従兄にあたる山本重太郎翁は「よく覚えてる、べそ掻きながら叔父さんに連れられてきた。胸に名前を書いた札を付けていた。結婚して下の村で暮らし、一人息子がいたが、六〇を過ぎたころ亡くなった」と語った。その息子

る父親の亡骸であった。六名の遺体は箱に入れ近くの雪原に埋められた。翌日は天気が悪く、鉱山小屋に逗留した。翌一四日未明、救助された六名と救助隊の一九名は助け合いながら、半日掛け籠まで下山した。五歳の幼女は、強力に背に負われ下山した。遺族の懇願もあり、北城警察分署は役場の力も借り遺体の発掘隊を四、五月と計画したが、残雪の影響等で延び延びとなっていたが、六月七日漸く出発となった。羽生巡查を責任者に、地元の強力八名、それに六二歳と高齢の北澤医師が死体検案のため参加した。遺体の識別は毛髪の長短で行い、携帯した箱に詰められた。翌日強力達の背で遺体は夜の八時に里に下り、九日火葬にふされ親戚等に遺骨は渡された。病名について、北澤医師は脚氣と推定したが、救助された高橋浅太郎は「今度の病気は多分野菜を喰わなかったからだと思います。昨年一月までには大方野菜を喰い尽して」と語っている。(信濃毎日新聞、富山日報、高岡新報)

さて、ここで被災者達のその後を辿ってみる。両親を一度に失った五歳の児は、一時危篤状態だったが、親切な村人の看病で元気を

さんに会うと「母は昔のこと一切話しませんでした。無口で、静かな母でした。私が弱いので気遣い亡くなりました」と写真を見せてくれた。写真には小柄で穏やかな顔のはなさんが、もんぺ姿で佇んでいた。

秋田林蔵さんの身内は入善市に住んでいた。「遺体を火葬にしたからお骨を受取りに」と連絡あったけれど、当時は大変な貧乏で、遺骨を取りにゆく交通費もなく、現地に埋葬してくれと連絡したと親から聞いています。親も私等もズート気になっていました。この後、秋田さんご夫妻は、白馬村の長谷寺を訪ね回向をとげ、積年の肩の荷を降ろした。

無事生還した一人の岩手湯田町出身の高橋常蔵(当時十八歳)は、その後も鉱山で働き、戦後は伊豆の鉱山を渡り、西伊豆の静かな海沿いの町で家族に見守られ亡くなった。

### 地元の資産家横沢本衛登場

このうち、紆余曲折があるものの、事業は発展しつつあったが、為田文太郎は明治四五年六月三〇日、同様に経営していた新潟県北

蒲原郡の古小屋鉱山で、火薬を調合中に引火事故で急死してしまう。為田は運転資金を北城村の旧家横沢本衛から融資を受けていたが、その負債額も多額だった。必然的に、鉱業権は為田文太郎から横沢本衛(もとえ)に移った。

横沢本衛は安政元年一月、横沢本右衛門の長男として生まれた。幼くして父を亡くし、一七歳で家を継いだ。家業は代々酒造業と麻問屋を営んでいた。横沢家の人達は、時代に敏感な人達であった。江戸末期の帳簿の裏に落書きがあった。「官軍国中平ニシテ安穩タルコト是全天ノ命ニ有、次に「冠や錦のはたをひるがえし目ざす処わいづせん大」と書いてある。官軍の進攻で、興が乗り書いたものだろう。最後の二字「壽朝」は、時代に対する期待が滲む。横沢本衛は郡会、県会さらに衆議院議員を務め、北安銀行、小谷貯蓄銀行、安曇電気(株)等々の創立に携わり、地方経済の発展に寄与した(北安曇郡史)。

「越中地籍大黒鉱山は、又、又、本月中旬より採掘に着手せり規模大にして目下主任として阿部工學士出張、それぞれ指揮監督の下に発展しつつあり。ために北城村は非常なる好況を呈しつつあり」(信濃毎日新聞、大正三年六月)。横沢本衛はこの年、意を決し、三六〇〇余円投じて(当時白米一〇kg、一円七八銭)、



横沢本衛



横沢本衛(丸八)宅 白馬村新田

倉庫など建物の改修、橋の架け替え、道の整備など鉱山経営に本腰を入れる。しかし、横沢本衛はこの後、大正四年一二月、病気で倒れる。為田、横沢と厳しい自然に挑み、地方経済を担った二人は、不遇にも事業半ばで他界したが、大黒鉱山は鉱主を変えこの後も続いた。(北アルプス開発史研究会)

山と博物館 第53巻 第11号

発行 年 2008年11月25日発行

〒 398-0002

長野県大町市大町八〇五六-一

市立大町山岳博物館

TEL 〇二六-二二二-〇二二二

TEL 〇二六-二二二-〇二二二

FAX 〇二六-二二二-〇二二二

E-mail: smp@city.omachi.nagano.jp

URL: http://www.city.omachi.nagano.jp/smp

印刷 有限会社 北辰 印刷

定価 年額 一、五〇〇円(送料含む)(切手不可)

郵便振替口座番号 〇〇五四〇一七-二二二九三



この「山と博物館」は再生紙を使用し、石油溶剤の代わりに大豆油を使用した大豆インキで印刷しています。